

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	宮沢賢治と中国に関する研究：西域童話と中国における受容を中心に
Author(s)	劉，春燕
Citation	
Issue date	2017-03-25
Type	Thesis or Dissertation
URL	http://hdl.handle.net/2298/37844
Right	

論文要旨

社会文化科学研究科 文化学専攻

141-G9207 劉春燕

本論文は、近代日本を代表する文学者である宮沢賢治（1896-1933）に関して、その文学と中国との関係を検討したものである。本論文は二部から構成されており、第一編では中国の西域を舞台とした通称「西域童話」を考察し(1-3 章)、第二編では中国における宮沢賢治の受容形態を検討した(4-6 章)。

第一編では、中国の西域を舞台とした「西域童話」についての考察を行った。宮沢賢治の著作には、「西域童話」と通称される作品群が存在する。本論文に取り上げる作品「マグノリアの木」、「インドラの網」、「雁の童子」、及び「北守将軍と三人兄弟の医者」は、個々には多くの研究で論じられてきた。しかし、「西域童話」という一つのテーマから 4 作品を横断的に考察した研究は少ない。また、これらの作品群の分析の前提として、賢治自身は西域を舞台とした作品群を「西域童話」だと呼んでいないことから、論者は通称される「西域童話」の定義そのものを再検討する必要があると考えた。再定義の視点として、賢治自身のメモ中の表現である「西域因果物語」という語に注目し、本論文では、これらの作品群が通称されるような「西域童話」としてではなく、「西域因果物語」の作品群として構想されていたと推定した。この賢治自身の「西域因果物語」という語を手がかりとして、これらの作品群を研究するための重要な切り口は、賢治の信仰した『法華経』における仏教思想や仏教要素であるという仮説を立てた。本論文の第一編である 1 章から 3 章では、これらの作品群について賢治の信仰した『法華経』における仏教思想や仏教要素に着目して考察した。

第 1 章では、「マグノリアの木」と「インドラの網」の 2 作品を取り上げ、賢治における仏教思想や仏教要素について考察した。具体的には、島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』方便品第二の「諸法実相」や「十如是」の仏教思想を参照しながら分析を行った。その結果、「マグノリアの木」は聖なる象徴として仏教思想を昇華させ、賢治なりの仏教思想である「諸法実相」や「十如是」への解釈を示す作品であると評価した。一方、「インドラの網」については、先行研究として原子朗の『新宮沢賢治語彙辞典』の記述を参照した上で、島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』見宝塔品第十一に書かれている盛大で荘厳な光景を作品の創作背景として措定し、そこでの天鼓や蒼孔雀といった仏教要素についての分析を行った。その結果、「インドラの網」は一般的な仏教思想を体現する作品というよりも、宮沢賢治が多大な影響を受けた島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』に現れていた情景を、視覚と聴覚の両要素に基づきながら賢治自身の幻想及び創作的な要素と融合して再現した作品であると位置付けた。以上の分析から、「マグノリアの木」と「インドラの網」における共通の「西域」的要素の原点と源流は、本願寺僧侶の青木文教師だけではなく、大谷探検隊の

西域の探検活動、特に島地大等の講話から深く影響を受けたことを確認した。この点については、秋枝（青木）美保の先行研究「釈迦聖地探検の実態」（「宮沢賢治「西域」作品と島地大等の印度仏蹟探検—作品「マグノリアの木」を視座に」、『人間文化学部紀要』、2016.）では、「釈迦の聖地はいずれも僻地にあり、踏査に困難を極めた」と指摘されている。それらの先行研究も参照した上で、第一次大谷探検隊の僧侶達が困難な聖地探検を経てようやく仏教誕生の原点もしくは釈迦生誕の地にたどり着いた偉業を、賢治は、聖なる仏教的な象徴としての〈マグノリアの木〉と〈インドラの網〉に比喻して讚美したのではないかと考察した。

第2章では、作品「雁の童子」を対象として、その作品概要、仏教出典、先行研究などを整理した上で、同時代の作品との関連性を具体的に例示し、作品中のエピソードが示す仏教思想や自然の法則、反戦性などの分析を行った。「雁の童子」は同時期の1923年頃の作品「インドラの網」・「学者アラムハラドの見た着物」・「ビジテリアン大祭」などと深い関わりがあり、賢治の思想を共通して内包していると推定される。この作品中の「童子」は様々な思想や言動を示しているが、作品中では賢治はそれを説明していない。「童子」は、いじめられても決して怒らないデクノボウ像でもあれば、悲しみを持つ慈悲菩薩像でもあれば、自然の法則を認識している仏でもあれば、密かに反戦的なメッセージを発信する平和主義者でもある。検討を通じて、「雁の童子」は「西域」を舞台にした賢治の理解する仏教の根本思想の下に位置しており、上記の童子像は宮沢賢治が目指した理想像を表現した作品であると評価した。

第3章では「北守将軍と三人兄弟の医者」を取り上げた。最初に、四つの改稿過程を経たから発表形となった「北守将軍と三人兄弟の医者」の作品概要及び先行研究を整理した。この「北守将軍と三人兄弟の医者」は1931（昭和6）年7月、佐藤一英編『児童文学』（文教書院）第一冊に掲載された、宮沢賢治の生前に発表された数少ない作品の一つである。この作品が発表された同時期、1931（昭和6）年4月に関東軍は満州への侵略を始めて、同年9月18日に中華民国奉天郊外の柳条湖で、南満州鉄道の線路を爆破した事件に端を発し、満州全土を占領した満州事変（中国側は九一八事変と呼ぶ）が起きたことは周知のとおりである。関東軍はわずか五ヶ月の間に満州全土を占領し、軍事的にはまれに見る成功を収めた。本作品はその満州侵略の期間に発表されたものであり、論者は、宮沢賢治がこの作品を通じて同時代の戦争について何かの寓意を提示しているという仮説を立てた。この仮説を裏付けるため、「北守将軍が馬とひとつになる」、「灰いろの人間」、「北守将軍と三人兄弟医者の関係性」、「北守将軍が仙人になる」という四部分についても分析をおこなった。満州事変という宮沢賢治自身が実際にメディアを通して接した同時代の戦争下に発表されたという事実を踏まえ、本作品が反戦作品として変遷していったという視点から分析を進めた。言うまでもなく、当時の日本では満州国における大陸の戦争への積極介入論が主流であり、反戦争論的な立場は人々に受け入れ難い時代であった。そのような同時代的な背景において「北守将軍と三人兄弟の医者」は、北守将軍と兵隊たちが灰色の人間という描写を通して戦争の非日常性と残酷さを表している点、戦争でかかった不思議な病気が

治ったという描写は戦争から解放されたことを意味すると解釈可能な点などのように、反戦作品として曖昧な表現、暗喩的な手法で表現されていると分析した。本作品に描かれた北守将軍像のように、人々は非日常的な戦争の時代においては国や絶対者に従うしかなく、自分が自分の運命を決められなかった。そういう意味で、「北守将軍と三人兄弟の医者」は当時の人々が抱いた戦争に対する無力感や虚無感を描き出した作品であると評価した。最後、将軍がすべての光栄や名誉を捨てて山に身を隠し静かな生活を選んだのも、当時の人々の反戦・厭戦の姿勢及び平和への祈願という大きな意味を持つと考察した。

以上、第一編では、宮沢賢治の西域作品群「マグノリアの木」「インドラの網」「雁の童子」「北守将軍と三人兄弟の医者」の創作背景や要素をまとめ、宮沢賢治の信仰した法華経との関係に焦点を当て、さらに同時期の作品との関連性、時代を表すイデオロギーなどの問題点を明らかにした。その結果、本来通称される「西域童話」という定義よりも、賢治の表現である「西域因果物語」という定義が有効であるとして評価した。そしてこれらの「西域因果物語」は賢治にとって法華経の昇華であり、自己内省の旅の証であると結論付けた。

第二編では、宮沢賢治と近現代中国との関連について考察した。現在、最大の中国語検索サイト「百度」で「宮沢賢治」というキーワードで検索すると、2016年3月15日まで関連サイトが382000件、関連論文は341件となっている。これらは王敏・于長敏・周異夫・周龍梅・彭懿・楊偉などの代表的な翻訳者・研究者による努力の結果である。そして現在、多くの中国の人々が賢治の詩に魅了されている事を示すものとも言える。本論文第二編では、具体的には中国における宮沢賢治の翻訳作品について検討を進めた。ここで重要なのは中国語への翻訳作品としての宮沢賢治作品の特性である。翻訳方法とその特徴、翻訳品間の比較、語彙の考察といった日本語から中国語への翻訳上の特性についての検討を行うことは、宮沢賢治の作品の考察において、非常に重要である。それらに関して、本論の第二編として4章から6章にまとめた。

第4章では、宮沢賢治と詩誌『銅鑼』の関係をめぐる論じた。宮沢賢治は中国を訪れたことはない。しかし生前に中国と文学的な繋がりがあった。それに深く関与する人物として草野心平がいたことは周知の通りである。1921年1月に、草野心平は中国広州の嶺南大学に進学している。彼の友人が1924年4月に刊行された賢治の自費出版詩集『春と修羅』を当時、嶺南大学に留学中の草野心平に送った。その『春と修羅』に感銘を受けた草野は、同人誌『銅鑼』で交友関係のある中国詩人の黄瀛に賢治の詩集について伝えた。『銅鑼』は1925年4月、中国広州嶺南大学に留学中の草野心平が日本詩人の原理充雄、富田彰及び中国詩人黄瀛、劉燧元（思慕）を共同出版者として招き創刊した詩誌である。1928年6月までに合計16号が発行された。賢治は1925年第4号から1928年第13号まで9回にわたり寄稿した。『銅鑼』は出版からわずか三年間という短い歴史であったが、中国広州において中日両国人の共同で創刊されたという事実は、当時としては非常に稀であるとともに日本

近代文学が中国と深い関係を持った出来事としても歴史的に非常に意義があることだと言える。『銅鑼』誕生における決定的な要因は草野心平や黄瀛らなどとの新人作家同士の交流から促されたものである。同詩誌における賢治と黄瀛との親交は、後の中国における賢治作品の伝播受容に大きな役割をもたらした。このように『銅鑼』という詩歌雑誌は賢治と中国との関係に関する研究において極めて重要な存在であると言える。この評価に立った上で、宮沢賢治と詩誌『銅鑼』をテーマとして、詩誌『銅鑼』の歴史概略、先行研究を整理した。それらに基づき、賢治が『銅鑼』に寄稿した13篇の詩作品を分析した上で、該当刊号の特色や傾向、及び掲載されたほかの詩歌雑誌との比較と関連性について検討した。それらの検討を通して、宮沢賢治と詩人黄瀛との歴史的な関係、『銅鑼』の特色・性格、及び時代的な意義を総括した。『銅鑼』への9回に及ぶ13篇の寄稿は、その他の賢治の発表活動と比較して、一つの雑誌への発表としては最も多く長かった。当時文学的な活動より農民や農村活動を優先的に行動した時期だったことを考慮すると、賢治の生涯を通じての詩人として活動中で『銅鑼』は過渡的な時期を代表する貴重な詩誌と言える。さらに、宮沢賢治と詩誌『銅鑼』との関係を考察することは、宮沢賢治の中国における伝播受容や翻訳などの研究に大きな意義を持つとも言える。しかし、賢治が『銅鑼』に発表した作品はこの時点ではまだ中国語への翻訳はされておらず、賢治作品の中国語への翻訳には、黄瀛と賢治の交友関係が大きく関わることとなる。黄瀛は中国の文豪魯迅と交流があり、魯迅の友人に翻訳家の銭稻孫がいた。銭稻孫は1941年4月に北京近代科学図書館出版より、「雨ニモマケズ」をタイトル「北国農謡」として翻訳し初めて中国に紹介した人物でもある。銭稻孫については5章で詳しく論じた。

第5章では、「雨ニモマケズ」と「北国農謡」について述べた。「雨ニモマケズ」は現在の中国において、もっとも読まれている賢治の詩である。なお、中国では様々な訳が出ているが、銭稻孫による翻訳である「北国農謡」がもっとも完成度が高いと言われている。銭稻孫は日本への留学経験を持ち、日中戦争の間、北京大学事務局長を任命され、校長と文学院院長などの職を勤めていた。そして、日本が開設した「東方文化事業」(日本側名称「対支文化事業」)の一つとして、北京近代科学図書館にて日本語講座を担当し日本文学の翻訳に取り掛かった。北京近代科学図書館が1938年8月に月報『書滲』を創刊し、第55号まで定期発行した。特色としては、専門の文芸雑誌ではなく、基本的に日本語であるが、一部、日本文学の中国語翻訳品も掲載していた。銭稻孫はその日本文学の中国語翻訳を担当し、『万葉集』をはじめとした古典詩から現代詩に至る幅広い日本の代表的な詩を翻訳し掲載した。銭稻孫は、そのような中で月報『書滲』の第4号に、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」をタイトル「北国農謡」として初めて中国に紹介した。『書滲』に発表された銭稻孫の訳歌の多くが、1941年4月北京近代科学図書館より出版された中国における最初の日本詩歌訳集『日本詩歌選』に「北国農謡」を含め収められた。故に、宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」は戦時中、『書滲』と『日本詩歌選』にて中国で2回紹介されていた。しかし、当時、日本の占領下にあった北京では、不幸な戦争時代ということもあって、銭稻孫は「日僞」、

「日本人もどき」と蔑まれ、あまり評価されていなかったようである。近年、中国人研究者の鄒双双は、文化交渉史という視点から錢稻孫の日本との関わりやその業績を見直し、改めて錢稻孫の翻訳家としての実績や貢献を再評価した。本章では、鄒双双の意見を参考しつつ、「雨ニモマケズ」と訳詩「北国農謡」をめぐって、翻訳家錢稻孫の紹介、北京近代科学図書館の事情、錢稻孫と宮沢賢治の接点、『日本詩歌選』の掲載状況などを考慮した上で、日本語の原歌である「雨ニモマケズ」と対比しながら訳詩「北国農謡」に見られる錢稻孫の翻訳の特徴を検討した。訳詩は漢詩の代表的な詩型である「四言・三言・七言詩」形式が用いられ、まさに北国を描く漢詩風の農謡だと言える。また、日本語の原詩にはない思想や表現や要素が取り入れられ、作者の意思がより鮮明に描き出され、読者に伝わってくる。苦しい農作業を味わいながらも、悠々と田園生活を楽しんでいる「苦中作楽」の心境が溢れている。困った人々に足を運んで助けにゆき、凶作に苦悩し訴える姿が人々に感動を与える。まさに、「北国農謡」は錢稻孫によるアレンジの完成度が高く、中国版の古文調農謡だと評価の結果を得たのである。「北国農謡」は賢治作品における中国語への初めての翻訳作品であり、その考察から中国における賢治作品の翻訳をめぐる問題を検討する上でも重要な意味を持つと考える。

賢治作品の翻訳の問題に関して、第 6 章で詩「春と修羅」の二つの中国語翻訳、呉菲訳と林少華訳をめぐり、それぞれの翻訳における文章の特徴や語彙解釈の相違について考察した。訳者呉菲は、賢治詩の重要な要素であるリズム感を保持するために、翻訳の方法としては基本的に直訳を採用した。訳詩の形や並べ方や記号などはほぼ原詩通りである。ただし、地名、仏教用語、人名、専門用語、造語、植物などについては解釈が多少加えられている。一方、林少華訳は賢治詩の持つリズム感を保持するより、詩全体の意味や繋がりがより分かりやすいように意識したと考えられる。故に、林少華訳の「春と修羅」は形式的に原文に従っていないが、詩全体の雰囲気（意識したとはいえできる限り）再現して翻訳したことが評価される。ちなみに、現在まで論者が中国の論文掲載サイトにて精査したところ、詩集《春天与阿修罗》に関する中国語研究論文は見つからなかった。

以上、本論の第二編では宮沢賢治の詩の中国における受容について検証した。これにより賢治作品の中国語の翻訳状況が明らかにした。宮沢賢治の詩は、表層に留まらない深層の意味を含み、多くの詩作の構造と解釈において依然として難解な部分が存在している。そのため賢治詩の中国語翻訳を行う際に、宮沢賢治の生涯や思想、生きていた動乱の時代や過酷な東北地方の風土などを十分に理解しなければ、正確な理解や原詩のリズム、隠喩的な意味などを捉えにくい。そのため、今後の賢治作品の中国語訳のために賢治の原作のリズム、意図を忠実に伝える上で寄与することを本論の第二編ではもうひとつの研究上の意図とした。

以上、本論文では、宮沢賢治と中国に関して、二つの大きなテーマから検討した。

第一に、宮沢賢治と西域作品群との関係についてである。中国文学・文化は宮沢賢治に

における西域作品群の創作の源泉のひとつである。そして、西域を舞台とし、生涯信仰した『法華経』と中国の思想や要素を西域作品群に取り入れることも賢治作品の一つの特徴と魅力である。宮沢賢治が中国の西域を舞台として執筆した作品は童話・短編・詩に分類されている。本論文に取り上げた四編の西域作品はその一部分に過ぎない。今後、他の西域作品の研究にも役に立つはずである。

第二に、賢治作品の中国における受容についてである。近年、中日の学術交流やインターネットの普及により、中国における宮沢賢治の伝播や軌跡を整理し遡ることが出来るようになった。戦前、宮沢賢治の詩集『春と修羅』が海を渡って草野心平より中国の文人たちに紹介されたが、中国語の翻訳作品はまだ少ない。歴史から見ると、翻訳作品の伝播段階は主に戦中と中国の特殊な歴史段階「文化大革命」後の現代に分かれている。戦時中、「雨ニモマケズ」（「北国農謡」）、「風の又三郎」（「風大哥」）、「注文の多い料理店」（「足件繁多的館子」）が当時の日本植民地満州・北京・上海に広まった。わずかの三つの作品であるが、中国における日本作家の翻訳作品の普及としては、大きな歴史的な意味を持つ。戦後、1980年に王敏は初めて「注文の多い料理店」を《花样翻新的饭店》として翻訳して以降、中国において宮沢賢治の作品は広く読まれるようになった。また、「銀河鉄道の夜」と「風の又三郎」といった作品も翻訳され多く出版された。本論文の宮沢賢治と中国で創刊された詩誌『銅鑼』についての考察は、中国に関する研究においては重要な一頁であり、中国語翻訳品の研究の発展を促したと言える。一方、「雨ニモマケズ」の翻訳「北国農謡」及び詩「春と修羅」の翻訳《春天与阿修罗》の考察は宮沢賢治作品の翻訳受容研究の開始となる。本研究が、今後の中国における受容研究にとっての参考となり、より幅広い研究に発展することを希望する。